

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	文化部哲學班：部報
Author(s)	北川
Citation	龍南, 248: 133-135
Issue date	1941-02-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8458
Right	

人間の姿が如實に現れる。かゝる窮極の所まで行つて、我々は忽然として悟るのである。知行同一未しの感にうたれ一層奮勵一番するのだ。

かくして我々は夏のインターハイを迎へた。参加校全て二十六校。試合前二日間の陸大での練習は又華々しかった。

明くれば八月二日。空は絶好の乗馬日和。練習の時あれほど障碍を飛越した馬も、一匹出場となると、もう膠着逸走思ふ様に行かぬ。そこを我選手はよく頑張つた。トーナメント式のこの試合に相手の乗りこなせなかつた馬も、よく手の中に入れ第一回松本高校との試合は百點

の差で快勝、第二回戦東京高校との勝負、敵も相當の巧手だつた。山下選手、西村選手も共に膠着で失權し主將田代選手も強引の一手でよく事なきを得た。然し相當の減點だ。吾々は手に汗を握つて相手やいかにと見守る。然し此方が乗り切れぬ馬をいかにして東高とても御し得よう。殆んど我が選手と同徹をふんだ。勝敗何れか、然し見よ我々は四十點の差で堂々勝つた。我が意氣と熱は完全に敵を壓倒したのである。明日の必勝を期す。

八月三日。残るは八校。凡て選り拔きの強豪。折柄襲ひ来る豪雨を排して、八高と對戦。之に勝てば、もう準優勝戦だ。頑張れ五高、しかし馬は陸大隨一の難馬。元

氣こそ余れ、あゝ我々は技倆に於て、少しく劣りたり。

山下選手先ず膠着に倒れ、事無きを得しは西村選手のみ主將田代選手の敢然強引帽子をとばし髪を亂しての奮闘も空しく野白選手亦振はず、之に對し八高は曲りなりにも全障碍を通過し、遂に彼をして名をなさしめた。本年棹尾の九州學生馬術大會には、田代、山下、西村、野白中村の各選手頑張るも我に利あらず惜敗

然し今や部長樋口教授率先指導の下に、中村、田上、田尻を始め笠、田代、山田、田上、萩原の二年の舊部員を中心に四十數名の全部員和氣霽々の裏に練習にいそしんでゐる。

文化部哲學班

今度の新体制により、哲學研究會は、文化部の中の哲學班となつた。この時に當つて、昭和十五年度の哲學研究會の活動を報告し、新しき哲學班の出發點ともして見たいと思ふ。一學期と、二學期の前半は「正法眼藏隨聞記」を讀み道元について研究した。二學期後半からは、アリストテレスの「ニコマコス倫理學」の拔萃を讀んで居る。之は三學期も續ける豫定である、冬休には、有志八名が残り、四日間アリストテレスの「政治學」第一篇を讀んだ。以下、「正法眼藏隨聞記」と、アリストテレスの「政治學」の讀後感を記し參考に供したいと思ふ。

アリストテレスの「政治學」讀後感

僅か四日間の研究會であつたので、第一篇しか讀めなかつたが、大いに得る所があつた様に思ふ。

政治學を讀んで先づ感じた事は、當時は未だ學問が分化して居らず、従つて種々の問題が極めてプリミティブな形で未解決のまま残されて居る事である。我々がカントやヘーゲルを讀む時には、その緻密な論理の網に魅せられてたゞ追隨するを得るのみであるのに對して、「政治學」を讀む時には種々の點で暗示される事が多い。最近の新しい問題に就いて言つても、この「政治學」の中から解決の緒を見出し得るものが多いと思ふ。

例へば、アリストテレスの考へ方は極めて全体主義的にナチス的である。この事を次の三點から述べて見ようと思ふ。

一、個人に對する全体の優先

もしニコマホスの倫理學のみを讀むならば、或はアリストテレスは個人倫理を説いた個人主義者であるかの如き感を受けるかも知れぬ。しかし、彼の政治學を讀めば彼が個々の人間を重んじたのは結局全体の完成のためであつたと云ふ事が分つて來ると思ふ。彼は政治學の中で大略次の如く説いて居る。

「總てのものは、そのものの有する本來的な能力作用に

よつて、そのものたり得るのである。従つて、身体から切り離された手足は名稱は手足でも、既にその本來的な能力作用を失つて居るから眞の手足ではない。以上に依つても分る様に部分は全体を俟つてはじめて生かされる。之は社會についても言へる事で、各人は個人として不完全であつても全体たる國家に歸屬することによつて完全なものとなり得る。而して社會生活の段階に迄至らぬもの、或はそれ自身完全であるために社會生活を必要とせぬものは、動物であるか、神であるかである。」

二、個人間の不平等

アリストテレスは近世の個人主義の稱へる如き平等主義を斥けて、各個人の不平等をとる。例へば、

「相互の安泰のために或者は本質上命令し、他の者は本質上之に従ふ。何となれば、洞察力と先見の明を有するものは本質上優者であり支配者であるが、單に肉體勞動のみをなし得るものは劣者であり本質上奴隸である。従つて主人と奴隸の利益は一致して居る。」

又「靈魂が肉體を支配するのが當然である様に、優者が劣者を支配するのは當然である。」と説いて居る。之はナチスの（これに相應して簡單な説明が欲しい）指導者原理と非常によく似て居ると思ふ。

三、人種不平等觀

個人間の不平等を認める思想は人種間の不平等に迄擴張されて居る。即ち、

「狩獵術は野獸に對して必要であるが、又、本質上奴隸となるべき人間にして、奴隸となる事を肯じないものに對しても必要である。而して、かかる際に於ける戦争は正義である。」之もゲルマン民族の優秀性を説くナチスの理論と好一對である。

以上僅に一例を挙げたにすぎないのであるが、アリストテレスの政治學の中には、たしかに暗示される點が多いと思ふ。しかしながら、二千數百年前のものであるために、問題の取扱方が極めて素朴であり、又當時の社會狀勢に左右されて居る點が多く、直ちに現代の問題に適用することは許されない。例へば個人に對する全体の優先を説くに當つて、世界なる全体を眼中に置いて居ない國家を全体とするためには、世界を全体とする考へに對する駁論を用意しておかねばならないと思ふ。又、奴隸制度を當然の事として居る考へ方も、一度近世の個人主義を経て來た我々にはそのままには受け容れられないものであらう。しかしながら、アリストテレスの思想から現代の問題に對して方向を與へてもらふ事は充分に出來ると考へられるし、又、アリストテレスこそ現代に生かされるべき人の一人であると考へられる。

(以上文三甲三 北川記)

道元の正法眼藏隨聞記について

文三甲二 沖田幸佑
文三甲三 北川秀則

昨年四月以來約半歲、池田教授の御指導を仰いで杜撰ながらも一應正法眼藏隨聞記を讀了した。次に簡単に感想を記して未讀の諸兄の御參考に供したいと思ふ。

道元禪師が一曹洞宗開祖たるにとどまらず、實に日本の生める最大の思想家たる所以は和辻博士の御紹介以上夙に世人の遍く承知する所であり、彼の大著正法眼藏も單に宗門内に於てのみならず、宗門外に於ても、眞摯なる哲學學律として、橋田邦彦、秋山範二、或は田邊元等の諸氏が夫々獨自の立場から研究を進めて居られる。

ところで正法眼藏隨聞記は、道元の弟子たる懷奘が師の講話を集録したものであつて、道元自らの著作ではなく、又直ちに正法眼藏と關係するものではないが、而も尙偉大なる彼道元の片鱗を窺ふ上に好資料たるを失ふまい。

然しながら此處に問題がある。その深遠なる思索に於て偉大なる哲學者道元も、彼自身旨とする所は飽く迄、